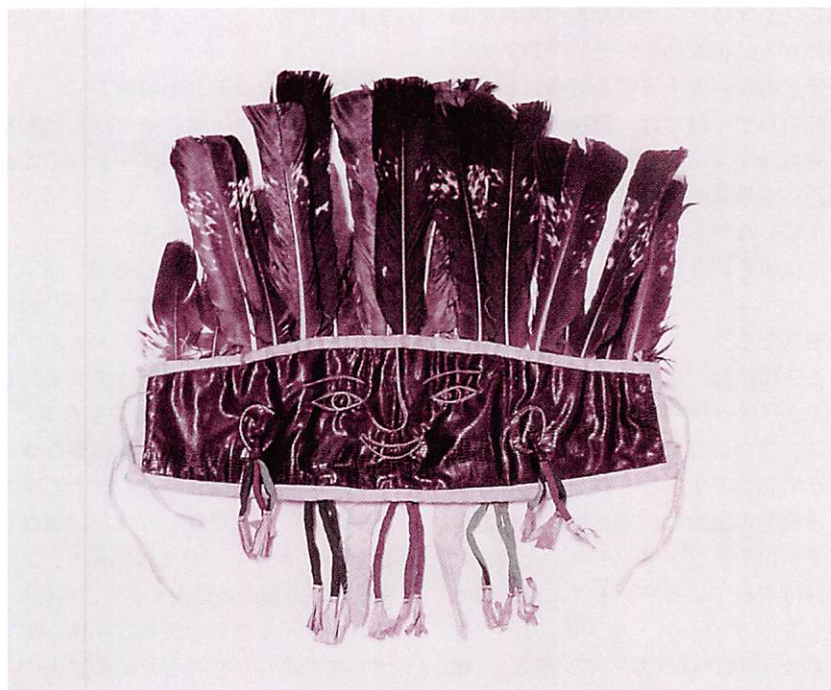




北方民族博物館だより

No.73



H16.108.1 シャマン用羽根飾り付きかぶりもの
トバ/ツァータン
モンゴル国フブスグル県ツァガンノール郡収集
全高54cm

目、鼻、口が糸の縫い目で表されている合成皮革製の帯に、鳥の羽根が24枚がつけられている。また、帯からは細い布でできたひもが下げられている。

シャマンのかぶりものの「目」は、シャマンが霊的な世界を見ている間に、シャマンの周囲を監視するためのものとされる例や、ツァータンのシャマンのかぶりものに描かれた顔は、チンギスハーン時代に仏教と戦い、現地のシャマン達に崇拜された英雄ゴナン・オラーン・バートルであるとされることもある。

本資料は上衣、履き物などで構成されるシャマンの衣装の一部であり、衣装全体では「鳥」を象徴している。

- 1 表紙 シャマン用羽根飾り付きかぶりもの
- 2 ロビー展「マンモスってどんな動物？」
- 3 ワークショップ 楽しくリメイク！キミのマンモス ボクのマンモス／「刺繍が伝えるアイヌの心～アイヌ刺繍入門」
- 4 INFORMATION

ロビー展

マンモスってどんな動物？

2009.4.11-5.24

昨年に引き続き、今年もロビー展でマンモスを取り上げました。昨年は、マンモスや同時代の大型動物が生きていた頃の環境や人との関わり方、絶滅理由、そして最新の研究成果などを紹介し、子どもから大人までを対象にした展示を心がけました。今回のロビー展では、個別の名前が付けられるほど世界的に有名なマンモスたちを通じて、彼らが見つかった場所の共通点や外見的特徴はどこにあるのかなど、現代のゾウと比較しながらわかりやすく紹介しようと努めました。以下に概要を紹介します。

＜有名なケナガマンモスたち＞

当館の実物大のマンモス模型は、生息地や生息年代が異なる4種類のマンモス（ヨーロッパマンモス、ステップマンモス、ケナガマンモス、コロンビアンマンモス）のうち、およそ40万年前から1万年前まで生息していたとされるケナガマンモスです。この模型の実物は、発見された付近の川の名前にちなんで「チレフチャフ・マンモス」と名付けられています。名前が付けられているマンモスには、植物学者のアダムスが発見した「アダムス・マンモス」、ベレゾフカ川付近で発見された「ベレゾフカ・マンモス」、雄の赤ちゃんマンモス「ディーマ」、雌の赤ちゃん「マーシャ」などがあります。

これらのマンモスたちに名前が付けられたのは、ほとんどすべての体の骨がそろっており組み立てが可能だったからです。中には全身の骨とともに皮膚や内臓などが見つかることや、ほとんどそのままのような場合すらあります。

＜見つかった場所＞

ほぼ原形を保ったままの状態で見つかる理由の一つには、その遺骸が肉食動物たちの餌となる前に、凍土内にはまり込んでの事故死が想定されます。実際、マンモスが発見されたときの姿勢は、穴でもがいて地上に出ようとするも果たせず、息絶えているように見えるそうです。凍土は、短い夏のほんの一時期に表土がとけるため土地の起伏はげしく、至る所に凹みが出ています。その凹みにうっかりはまってしまったマンモスたちの上から土や雪が積もり、凍土内深くに閉じこめられてしまったのでしょう。このように冷凍保存されたため、生きていた当時の、実際の姿形をほぼ保ったままのマンモスが見つかったのです。

マンモスは、土地が傾斜し、地中が露出しやすい海沿いや河川沿いで発見されやすいです。しかしこうした場所以外にも多くのマンモスたちが埋まっていることでしょう。地球温暖化現象によって、凍土層が溶け、薄くなってゆけ

ば、より多くのマンモスが発見される可能性は高いと思います。

＜ケナガマンモスの特徴＞

チレフチャフ・マンモスたちは私たちに多くのことを教えてくれます。彼らの体を調べることで次のような特徴が分かりました。

【特徴その① 大きさ】

ケナガマンモスの大きさは、大人で高さ3m前後、体長5m前後、体重4トン前後でアフリカゾウより少し小さく、アジアゾウと同じくらいの大きさです。ケナガマンモスは地面に生えている草や低木を大量に食べて、この大きな体を維持し、およそ65歳まで生きることができました。

【特徴その② 寒さに強い体つき】

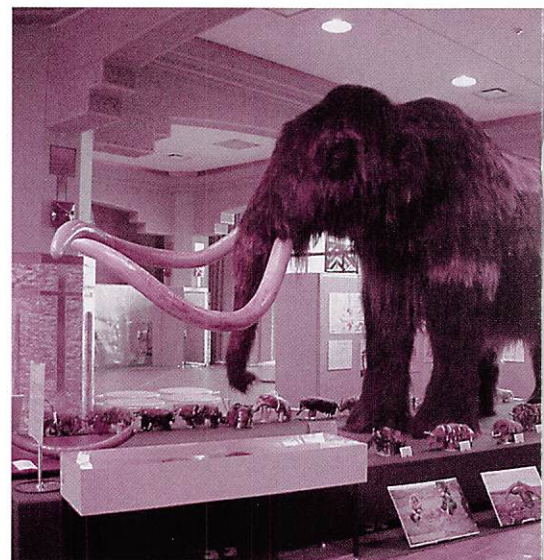
寒い地域で生活してきたケナガマンモスは、暖かい地域で生活している現在のゾウとは異なった体つきをしていました。ケナガマンモスは毛深く、2種類の毛が重なっていました。外側の毛は固く長く、内側の毛は柔らかく短くなっています。また耳や尻尾は小作りです。これらの特徴はすべて寒さから身を守るための工夫で、体内の熱が外に出るのを抑えるのに役立ちました。

【特徴その③ 大きな牙とがった頭】

ケナガマンモスの牙は長く、内側に曲がっています。牙は前歯（切歯）が伸びたもので、1本で70kg以上の重さのものも見つかっています。なぜ、こんな形の牙を持っていたのかはよく分かっていません。

この長くて重たい牙を支えるためには、丈夫な頭や筋肉の発達した首、肩、前肢が必要となり、立っている姿は前肢でつつばるような格好だったようです。そのためマンモスの背中、頭からおしりにかけて緩やかに傾斜していました。

（学芸グループ
角達之助）



ワークショップ

楽しくリメイク！ キミのマンモス ボクのマンモス

2009.4.26

講師 大西 重成氏（立体造形作家・シゲチャンランド館主）

ロビー展開連事業として、実物大模型を見ながら、身近なものを利用してオリジナルのマンモスを作ろうという小学生対象のワークショップを行ないました。



子どもたちを見まもる大西さん

まず、ラップフィルムなどの紙芯4本の上部にあけておいた穴に割り箸をとおして2組にし、前脚と後脚を作ります。そこに丸めた新聞紙と牙になる「流木」を針金やガムテープで固定して、体の土台を作りました。流木は、指導してくださった大西さんがご自身の作品にもよく使われる素材で、館職員が事前に海辺で拾い集めて用意したものです。

体ができると、適当な大きさに切った古着でくるみ、縫い合わせました。参加対象を小学3年生以上としていましたが、慣れない素材や道具の扱いに苦戦し、バランスよくしっかりと形作るまでに、大半の子どもたちが予定の2時間を過ぎてしまいました。しかし、マンモスの特徴であるふさふさの毛をつけたい！ということで、時間を延長し、思い思いの色の毛糸を貼り付け、ボタンで目をつけて、完成しました。

大西さんは、「想像していた以上に、子どもたちが工夫をし、バラエティに富んだものができた。博物館のマンモスに子どもがたくさんできたみたいで、楽しいワークショップだった」とおっしゃってくださいました。

できあがった作品は、参加者が実物大マンモスの足元の好きな場所に置き、ロビー展の会期末まで一緒に展示しました。（「ワークショップ作品展」4/29～5/24）（学芸グループ・齋藤玲子）

講演会 & 講習会

刺繍が伝えるアイヌの心 ～アイヌ刺繍入門

2009.3.14

講師 西田香代子氏（北海道ウタリ協会優秀工芸師※）



西田香代子氏（右端）

北海道ウタリ協会優秀工芸師であり、また釧路市阿寒町で民芸店を営む西田香代子氏を講師に、アイヌ刺繍に関する講演会と講習会を開催しました。

はじめに西田氏からアイヌ衣服の種類、刺繍の用語や文様構成、手法などについてのお話がありました。

その後西田氏の指導で参加者が「箸袋」へ刺繍しました。ものを大事にする気持ちを伝えたいという西田氏の希望もあって選択した題材です。この箸袋は藍染めの木綿を使った西田氏オリジナルのもので、刺繍する文様も初心者が、やりやすいものをデザインしていただきました。

アイヌ刺繍はできあがったものに施すということですので、箸袋は事前に縫っておきました。文様の主体は、アイヌ語で「オホ」とよぶチェーンステッチで刺し、刺繍の端や角には「キラウ」（角の意味）とよぶステッチを刺します。

初心者の方からは、「時間が足りなかった」、多少刺繍の経験がある方からは、きれいに角を仕上げるコツを会得できてよかったなどとの感想がきかれました。



※北海道ウタリ協会は平成21年4月1日に、北海道アイヌ協会へ名称変更しました。

（学芸グループ・笹倉いる美）

